

表紙絵解題

中国人の描いた「ロードス島の巨人像」  
——「右」と「左」と

内田慶市

『點石齋画報』(1884年5月8日創刊、1898年8月終刊)には数々の「新生事物」が登場する。『或問』第9号の表紙絵に掲げた「水底行船(潜水艦)」もそうだし、気球や飛行船、あるいはロボット、カメラなども出現する。今回のものは、「銅人跨海」と名付けられた、いわゆる世界の七不思議の一つである「ロードス島の巨人像」である。地中海の小島「ロードス島」の港には、紀元前304年にマケドニアの侵略を撃退した記念として太陽神ヘリオスをかたどった青銅製の巨人像が建設され、右手には炎、左手には大きな弓矢を持っていたとされている。

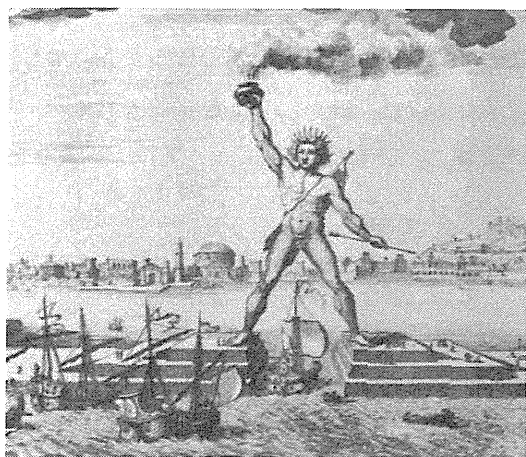


図 1<sup>1</sup>



図 2<sup>2</sup>

この巨人像はその後 17 世紀のヨーロッパにおいては世界地図によく描かれたものようで、たとえば、南懐仁(フェルピースト)の『坤輿圖説』(1674)には図3が掲げられている。

『點石齋』のものも恐らくは『坤輿圖説』を元にしてあるものと考えられるが、その解説は漢訳「イソップ」と同様な書き始めとなっている。つまり、このような世界の七不思議の巨大

<sup>1</sup> <http://ce.eng.usf.edu/pharos/wonders/colossus.html>

<sup>2</sup> [http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Colossus\\_of\\_Rhodes.jpg](http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Colossus_of_Rhodes.jpg)

建築物すらも、わが中国には古くから存在したという一種の「中国同化」の反映がそこには見られる。

漢武帝範銅為仙人，以玉盤承露，高出雲表。或疑史冊所書未免鋪張過分。近有客自海外歸，言樂德海島之港口，有銅人一具，跨海而立，其跨下能容大船經過；左手執燈，燃之，光照數十里，俾夜行者得認識港口，以便靠泊。據說，創造之時，每日鳩工千餘人，凡十二年而後成。至點燈之法，尤為奇巧：空其中，為旋螺式之暗梯，自內而登，由是至手，可拾級趨焉。聞者笑曰：“如子言，固堂堂一表也，但惜其為空心貨耳。

(漢の武帝は銅で仙人を鑄造し、玉盤で甘露を受け、高く雲表に出たというのが、歴史書の記載というものはどうしても誇張は免れないところではある。最近、海外から帰国した人が言うには、ロードス島の港には一つの銅人があり、海を跨いで立っており、その股下を大きな船も通れるということである。左手にはたいまつを持ち、その光は数十里を照らし、夜航海するものはそれによって港がわかり、停泊することができるという。また話によれば、それを作る時には、毎日千名あまりの労働者が集められ、およそ12年で完成したが、その灯りを点す方法がまた巧妙であるという。つまり、銅像の中をくりぬき、螺旋式の階段を作り、中から登り、そこから左手に至るわけで、一段一段と進んでいけるようになっているらしい。それを聞いた人は笑って言う。「なるほど、確かに堂々たる姿であるが、ただ中が空っぽなのは何とも惜しいことである」と。)

この話の元になったと思われる『坤輿圖説』の「七奇圖」(七つの不思議な図)に見える記述は次の通りである。

### 二銅人巨像

勒德海島，銅鑄一人，高三十丈，安置於海口。其手指一人難以圍抱，兩足踏兩石臺，跨下高壙，能容大船經過。右手持燈，夜間點照，引海船認識港口叢舶。銅人內空通，從足至手，有螺旋梯升上點燈。造工者每日千餘人，作十二年乃成。

(ロードス島には銅像があり、高さ三十丈で、港の入り口に置かれている。その指は一人では抱えられないほどの大きさであり、両足で二つの台の上にたっていて、その股下は高く広々としており、大きな船でもその下を通過できる。右手には灯りを持ち、夜はそれに灯りが点され、船舶は港の在処を知って停泊できるのである。その銅像の中は空洞になっていて、足から手に至るが、螺旋階段があって上に登って灯りを点けるのである。それを

作る労働者は毎日千人あまりで十二年を経て完成した。)



図 3



表紙の絵

艾儒略(アレニ)の『職方外紀』(1623)にも以下のように「亞細亞總説」中の「地中海諸島」の項に登場する。

### 地中海諸島

亞西亞之地中海有島百千，其大者一曰哥阿島，(中略)一曰羅得島，天氣當清明(中略)其海畔嘗鑄一鉅銅人，高踰浮屠，海中築兩臺，以盛其足，風帆直過跨下，其一指中可容一人直立，掌托銅盤，夜燃火于內，以照行海者。鑄不(十)二年而成，後為地震而崩。國人運其銅，以駱駝九百隻往負之。

図 3

(一つはロードス島で、その海辺にはかつて一つの大きな銅像があって、佛像よりも遙かに高く、海中に二つの台を築いてそれに足を乗せている。帆船はその下をそのまま通過することができ、また、その一本の指でも人一人を立たせるに十分な大きさである。手には銅の皿を持ち、夜はその中に火を燃やし、それによって航海するものを照らしている。鑄造するのに十二年かかってようやく完成したが、その後、地震によって崩壊した。その国の人々はその銅を運ぶのに、駱駝九百頭を使ってそれを担わせたという。)

また、このロードス島の巨人像は日本にも早くから伝わっており、たとえば、森島中良の『萬

『萬國新話』(寛政12年=1800)にはその付録に「巨銅人」として詳細な解説付きで収められている(図4)、司馬江漢の『和蘭通舶』(文化2年=1805)にも載せられている(図5)。



図4

『萬國新話』の記述は以下の通りである。

亞細亞洲地中海の内に「ロツデス」といふ一の小島あり。「ナトーリヤ」に属す。諸國の商船湊集して最豊饒の地なり。其島の港口に銅を以て鑄成たる一軀の巨像を建てり。名て「コロシュス」といふ。両足は海中より石をもつて築たる。二の臺を踏て立てり。其跨下高闊にして巨艘行走して逼停せざるに至る。手の指尋常之人両手をもつて合抱ことあたはず。全体のおほいさこれを以て准へ知るべし。遠方より量時は精巧無比。まことに海内の奇觀なり。往昔國君鑄工「レイシッピジッシピエール」なる者および其弟子「カーレスレインデユス」なる者兩人に命じて造成せしむ。其像を建る時。大石数多體內に納て鎮とし。永久に安置せん事を計たる。夫より星霜六十五年を経て後。地震の爲に摧倒せられ。其址ともに海に沈没す。碎て涯にあるもの阜陵の如し。國王縣令「サラセシネン」なる者に令し。駱駝九百隻を以て彼破壊せる巨像を寺觀に運送せしめ各所に是を修藏せしめたりとぞ。明の末西洋より歸化の人支那に到る時。彼海口を過て親く銅人を見たととなり。左手小燭を持て。夜はすなはち海舶を照し。瞭然として港涯を認るに便ならしむ。其火を點さんとする時は。足の内に旋れる梯あり。層を経て昇れば。體內をめぐりて掌上に出。燈に火を施すとなり。此銅人の発拳より。日々に人夫千餘人。およそ十二年にして落成すといふ。此圖此説ともに北山汎泥亀子に得たり。是紅毛画を複写せる物なり。

この文章は先の『坤輿圖説』と『職方外紀』を合わせた上にさらに他の文献からの潤色を施してある。

さて、『點石齋』の記述は『坤輿圖説』をほぼ踏襲しているが、よく読むと実は大きな違いが一個所ある。それは「燈りを持っている手」が、『點石齋』では「左手」に、『坤輿圖説』では「右手」になっている点である。ただし、その絵はどちらも「左手」である。

日本のものは「左手小燭を持て」とあり、その図も明らかに「左手」である。

これは一体どういうことなのか。

本来、伝承では「右手」に燈りを持っていたのであり、『坤輿圖説』でも確かに「右手」とあった

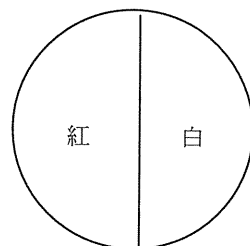


図5

のを、その絵を描いた者(中国人)が、それを「向かって右」と解釈してしまったためであると考えられる。そして、その誤った絵を元にして結局日本でも中国でも文章を書き直すということに至ったのであろう。

「左右」の方向観念というのは民族によって異なるとされている。古代の中国人は「見る側(描く側)」からでなく、「見られる側(描かれる側)」を基準にしていた。「左青龍、右白虎」がまさにそれである。もちろん、この場合は「坐北南面」が背景にあるのではあるが、基本的には「見られる側」を基準としていた。ただし、後世には「見る側」を基準とする方向観念も現れてくる。たとえば漢字の偏旁における「右文説」がそれである。中国人の本来の見方からすれば「旁」は「左」であるが、「右文説」では「向かって右」となる。つまり同じ民族でも時代的にも差が出てくるから厄介である。写真を見ながら「右から三番目」とか、下の図のような場合、「紅」は「左」か「右」か、これらは一筋縄ではいかないようである。

何はともあれ、『點石齋』に描かれた巨人像は、早くから中国や日本に伝わっており、それらがヨーロッパ人宣教師によってもたらされたことは明かであり、彼らの東アジアに与えた影響とはまこと計り知れないものがあるのである。



## 『或問』第5号 2003年1月

## 目次

論文	中国語における外国国名表記の固定と変化	千葉謙悟	1
	日語「女性語」的中訳	王 敏東	13
	中村敬字『英華和訳字典』の典拠	宮田和子	21
	越南語的主要詞彙特徴	黄 力游	31
	中国語における新語の受容	氷野善寛	43
	康有為とその日本書目志	沈 国威	51
	清代の買辦について	松浦 章	69
翻訳	『官話文法』(1703) (4)	Francisco Varo	83
十字路	三角帽子雑感	萩野脩二	105
	東西文化交流の踪跡を探し求めて (I)	沈 国威	109
情報の泉	西学東漸研究の欧文文献情報	Joachim Kurtz	113
	西学東漸研究の中文・日文献情報	沈 国威	119
	表紙絵の解題：『小孩月報』に見られるイソップ	内田慶市	123

## 『或問』第6号 2003年5月

## 目次

追悼	尾崎實先生を偲ぶ	尾崎和子	1
	内田慶市 北岡正子 西川和男 佐藤晴彦 荒川清秀 周 振鶴 塩山正純 奥村佳代子 西山美智江		
遺稿	『官話類編』所収方言詞対照表	尾崎 實	19
論文	清代の自鳴鐘について	松浦 章	53
	「自転」という語の起源をめぐって	舒 志田	67
	商人・僕人・通事と18世紀中国沿海洋涇浜語的形成	司 佳	85
	唐話資料の二面性	奥村佳代子	95
	徐建寅和傅蘭雅翻訳『化学分原』の一個譯稿本	王 揚宗	109
翻訳	『官話文法』(1703) 補遺	Francisco Varo	115
十字路	グラスミア湖の畔にて	森瀬壽三	123
	近代漢字語研究の新機運	沈 国威	127
情報の泉	西学東漸研究の欧文文献情報	Joachim Kurtz	133
	西学東漸研究の中文・日文献情報	沈 国威	136